

石川啄木の筆跡考

「悲しき玩具 歌稿ノート」の筆跡について

湯澤 比呂子

（二〇〇〇年一月二七日受理）

一、はじめに

岩手大学教育学部公開講座「石川啄木の世界」に平成十年年度から筆者も講師の一人として関わることになった。それまでも石川啄木（以下「啄木」という）の書については、筆者が所屬している書道会の研究誌に書道愛好者を対象に小論を寄せたことがあった。公開講座で再び啄木の書や様々な資料に触れる機会を持ち、改めて啄木の書が個性的で卓越した技量を持っていることを再認識した。しかしそこで、「悲しき玩具 歌稿ノート」の前の部分の明治四十三年十一月から翌年六月までの一七五首（図ア、以下〈一七五首〉という）と八月以降の十七首（図イ、以下〈十七首〉という）の筆跡は、書風の違いから別筆ではないか、との疑念が脳裏から離れなかった。

疑念を持ちながら、「悲しき玩具 歌稿ノート」の筆跡に関する先行研究や種々の資料に当たると、この疑念に対する解答の新たな確証を得た。先行研究としては管見の範囲では三件が挙げられる。一つは故吉丸正夫氏の「石川啄木の筆跡」である。氏は、近似性のある文字の抽出と、永年の書家としての経験から、凝視

によるいわば直感で、〈十七首〉は〈一七五首〉と同筆であると断定している。二つ目は論文としてまとめられてはいないが、故菊地利昭氏の「啄木の筆跡について」の資料がある。氏は、若干の疑問の余地を残しながらも異筆説に傾いているようである。三つ目は久保田恵子氏の「石川啄木の書」である。氏は菊地氏の疑問を受けながら、異筆説を打ち出している。これらは、傾聴すべき点も多く含んでいるが、いずれも疑念を払拭するに十分ではない。

本稿では、結論としては同筆説を支持するが、まず代筆の可能性を指摘されている妹光子についての検証を行う。次に、啄木の筆跡全体の特徴の分析を行い、その結果を基に他の啄木の筆跡資料との比較検討をし、実証的に証明する。

二、先行研究について

1 故吉丸正夫氏の「同筆説」について

吉丸氏は、昭和四十九年の啄木忌に盛岡啄木会が複製刊行した『悲しき玩具 直筆ノート』に眼を触れて、〈一七五首〉と、〈十七

首〉の筆跡が異筆ではないかという疑問が湧き、その解明の研究に着手したのであった。

氏は、〈十七首〉の筆跡が一見女性の筆跡と直感されたことから、妻節子と妹光子の筆跡とを比較検討し、外的条件と近似性から光子筆跡に一旦は傾いた。しかし、〈一七五首〉と〈十七首〉に共通する数文字を選び出し、「抽出比較表」を作成しているうちに、近似性のある文字を発見した。そして、氏の言葉を引用すると、「凝視を重ねること数度。すると次のような明白な共通文字が浮かび上がってきたのである。(中略)かくしてこれは啄木の同筆であることの確信を、その凝視の中からえたのであった。」とあるように、氏のいわば直感によって、啄木の直筆であるとの結論に至ったのである。

氏の論述を見ると、「抽出比較表」には同筆と断定するには首肯しかねる文字もある。また、選定された文字以外では近似性の低い文字もあるが、それらに対する見解がない。さらに、氏の実証方法は、永年にわたり培ってきた優れた感性に基づくとは言え、直感による判断であり、科学的、実証的方法とは言えない。したがって、同筆と断定するには無理がある。

2 故菊地利昭氏の「同筆説への若干の疑問」について

氏には論文としてまとめたものはないが、生前作成した岩手大学教育学部公開講座「啄木の筆跡について」の資料の中に、以下のような記述がある。

7、〈歌稿「悲しき玩具 直筆ノート」の筆跡について〉(資料8)

*吉丸竹軒氏の「石川啄木の筆跡」研究における同筆説へ

の若干の疑問

- 1) 8月以降(十七首)の筆跡における書風変更の必然性
- 2) 比較検討の文字抽出の方法について
- 3) 変体仮名や連綿の多用
- 4) 妹光子女史の筆跡との近似性
- 5) 函館市文学館「啄木コーナー」の筆跡資料(日本近代文学館蔵)

これを見ると、「同筆説への若干の疑問」という文言があり、吉丸氏の同筆説に疑問を抱いている様子がうかがえる。しかし、詳細については不明である。

3 久保田恵子氏の「異筆説」について

氏は、卒業論文において、菊地氏の指導を受けながら、吉丸氏の抽出した文字の比較表に洩れている文字について考察し、逆に似ていない文字を抽出し、近似性を否定している。そして、妻節子と妹光子の筆跡を比較検証した結果、光子の筆跡が、〈十七首〉の筆跡に最も近いと結論づけている。

また、明治四十三年七月から光子は上京し啄木の看病に当たっていることから、筆写は光子であろう、と推測している。

氏の抽出比較表による文字の選定は、吉丸氏とは逆に近似性の乏しい文字を挙げているが、近似性の高い文字についての説明がなく、不充分である。

また、光子が、上京し看病したことから代筆説を結論づけるが、その確証はない。確かに光子は明治四十四年八月十日から九月十四日まで啄木の看病に当たっている。しかし、光子が後年記した『兄啄木の思い出』の中で、啄木一家の手伝いに出向いたときの様子もかなり詳しく記しているにもかかわらず、代筆をしたような

ことは一切記されていない。

三、妹、光子の代筆の可能性について

先行研究で啄木の代筆の可能性を最も指摘されているのは、妹の光子である。吉丸氏は、光子の七十歳代の筆跡を挙げ、近似性を述べている。もっとも吉丸氏は啄木生存当時のものでない光子の七十歳代の筆跡を根拠とすることに躊躇してはいる。幸い筆者の目に止まった光子の筆跡(図ウ)があるので、これと比較検討してみたい。文面の内容から大正三年、二十六歳のものであると思われる。〈十七首〉が筆記されたのは明治四十四年八月であると考えられるから、この光子の筆跡は啄木の死後二年後のものである。吉丸氏の資料にくらべると時間的差による筆跡の変化の可能性は少ないと考えられる。

光子の筆跡の特徴は、

- ①字形の概観が一定せず、縦長に、横長に、その場にに応じて変化している。
- ②字形の傾きも右上がり、水平、右下がりとも多種多様である。
- ③連綿が多い。実画で連綿していない部分も意連で繋がっている。

④一行の中でも文字の中心が左右によく移行している。

⑤〈十七首〉には見られない筆勢がある。

などである。〈十七首〉との共通点を挙げると、連綿が多い点であるが、その他の特徴は〈十七首〉とは大きく異なる。これらの相違は重要なポイントで、〈十七首〉と同筆とは思われない。また、前述したように、後年の光子『兄啄木の思い出』の回想からも代筆は考えにくいのではないか。

四、啄木の筆跡の書風について

筆者は今回、啄木の様々な筆跡を通観し、啄木の筆跡に関して表のような全体像を得た(表参照)。

系統	特徴	書体	型
一種系	・横長 ・楕円形 ・水平、垂直	単体・時に連綿もある。 主に、行書、草書、平仮名。	具体的資料名・参考図版等 図ア・図エ・図オ・原稿用紙 A型
二種系	・縦長 ・長方形 ・右上がり	単体 主に、楷書、平仮名 主に、行書、草書、平仮名。変体仮名は多い。	図カ・図キ・書簡・葉書 図ク・図ケ・図コ・図サ・図シ・図ス B型
	連綿	主に、行書、草書、平仮名。変体仮名は多い。	図イ・図セ D型

啄木の筆跡として一般に知られている特徴は、
①文字の大きさがほぼ揃っている。漢字は仮名よりやや大き目に書かれている。

- ②単体が主であるが、時に連綿も見られる。
- ③書き始めから終わりまで、一貫した調子で書かれている。
- ④点画が明確で、比較的読みやすい。
- ⑤懐が広い。

等が挙げられる。

表のように字形から大きく二種の系統に分類出来る。横長水平の方をここでは「二種系」、縦長・長方形右上がりの方を「二種系」とし、さらに、二種系の単体例をA型、連綿例をB型、二種系の単体例をC型、連綿例をD型として論を進める。A型に分類されるものは図エ・図オ、B型に分類されるものは図カ・図キなどである。

一種系の特徴を詳述すると以下のようになる。

- ①横長、偏平な字形で懐が広い。
- ②横画は水平である。
- ③書写速度が速い。
- ④円運動が基本である。

二種系のC型に分類されるものは図ク・図ケ・図コ・図サ・図シ・図スで、D型に分類されるものは図セなどである。

二種系の特徴は、

- ①縦長、長方形の字形である。
- ②横画は、右肩上がりである。
- ③書写速度が遅く、丁寧な運筆である。

このように、一種系、二種系ともさらに文字の単体か連綿かによって、それぞれ二つに分類出来る。

五、「悲しき玩具 歌稿ノート」の筆跡について

1 筆跡の特徴

このノートの筆跡は、冒頭で述べたように、「一七五首」と「十七首」は書風が異なる。尚、「一九三首目（大跨に椽側を歩けば）」で終わっており未完成のままである）は「一七五首」と共通の特徴を持つ。

それぞれの特徴を挙げてみよう。

(1) 「一七五首」の特徴(図ア参照)

①主に単体である。一首目から八十首目と、一九三首目の筆跡は、単体で一字ずつ完結しながら次の字へ移っている。因みに連綿は歌八十一首中九回ある。八十一首目から一七五首目の筆跡も、やや連綿は増えるものの単体が主であり、九十五首中三十三回である。合計で一七五首中、四十二回である。

②字形の特徴として、横長で扁平、懐広くゆったりしている。円形に近く暖かみを感じる造形である。

③横画は水平に保たれ、転折で丸みを帯びている。

④漢字は行書・草書が使われている。

⑤変体仮名の使用が少ない。

⑥書写速度は速い。

(2) 「十七首」の特徴(図イ参照)

①連綿が多い。十七首中、実線による連綿は二〇〇回である。

②筆圧が弱くなり覇気がない。

③字形は縦長の長方形で、懐は広く、安定感がある。

④横画は右肩上りである。

⑤楷書はほとんど見られず、行書・草書が多いが点画は明瞭に書かれている。

⑥変体仮名の使用が多い。

⑦字間が伸びている。

⑧書写速度は遅い。

(3) 歌と歌を区切る丸印について

このノートの歌と歌との間に書かれてある直径五ミリメートルぐらいの丸印は、「一七五首」も「十七首」も一貫した調子で、ほぼ同形・同筆圧で書写されている。

2 〈十七首〉と近似する他の啄木の筆跡

まずC型について見ていこう。

・(図ク)は、「秋風記、綱島梁川を弔う」の新聞切り抜き帳の扉(明治四十年、四月)

内容は、函館から小樽へ移ったときの事情を述べ、札幌滞在三週間の記念としたものである。また、「啄木識」の署名がある。

・(図ケ)は、「浪淘沙詞六首」(明治四十一年頃)、啄木が愛誦した「浪淘沙詞」である。

・(図コ)は、「爾曹悔改めよ」(明治四十四年四月)、ノート八十ページにわたる書写。

書体は楷書と平仮名で、単体表現。点画が柔らかいが、縦長で右肩上りである。「し」の曲線に波打っているところは、〈十七首〉の筆跡と同形。

・(図サ)は、「A LETTER FROM PRISON」(「民衆の中へ」)明治四十四年五月)

表紙とはしがきの一部である。縦野のノートに整齐に書写された筆跡。特徴は(図コ)と同様である。

・(図シ)は、「はてしなき議論の後」の詩稿ノート(明治四十四年六月)

若山牧水主宰の雑誌「創作」七月号の巻頭を飾った「はてしなき議論の後」と題される詩である。(図コ)と全く共通する特徴がある。例えば、漢字と仮名の調和のとり方が、漢字は仮名より大きめで縦長である。字間のとり方も共通している。字形は全体が右肩上がりで一貫した統一性がある。

・(図ス)は、「呼子と口笛」(「石川啄木直筆ノート」の一部、明治四十四年六月)

(図シ)を楷書で横書きしたものである。全く同じ書き振り、書き味で、点画の角度や位置、文字の形状が同じである。

(図ク)(図ケ)はこのような内容のものに代筆を依頼するとは考えにくい。代筆であれば、代筆者名を記すのが普通であろう。(図シ)も(図ス)も同筆と考えられる。〈十七首〉と同一に使われている漢字は、ここでは「為」であるが、他の頁に同一に使われている漢字は多数見られる。単体であるが〈十七首〉と酷似している。

次にD型について見ていこう。

・(図セ)は、明治四十二年の歌稿ノートの一節である。彼が愛誦した(図ケ)の漢詩を題材に作った歌である。変体仮名を多く交え、点画の連続が若干見られる。変体仮名の種類も〈十七首〉と同じものを用いている。その字形は、他の楷書体の漢字の字形と同じである。変体仮名は同じ音の文字でも数種ある。にもかかわらず、ここで〈十七首〉と全く同じ変体仮名を用いている。〈十七首〉に極めて近似性が高い。(図セ)が〈十七首〉と文字造形も同じであることは、同一筆者でなければありえないことではないかと思われる。

このD型は、「二種系」の中のC型として挙げられる楷書群と共通した字形である。

以上のことから、〈十七首〉のこれら特徴を、先の分類表に照らし合わせてみると、「二種系」のD型ということになる。

六、まとめ

このように、五の2で挙げた(図ク)と(図セ)の筆跡と、〈十七首〉の筆跡を比較してみると、書体は(図ク)と(図ス)は楷書で、(図セ)は行草書体と書体の違いはあるが、字形は驚くほど酷似している。同一人物の筆跡と断定して間違いない。前述した歌と歌を区切る丸印の比較からも〈一七五首〉の部分と〈十七首〉

の部分は同筆であるように思われる。そして、この楷書の筆跡が啄木の直筆であるなら、〈十七首〉も啄木本人の自筆であると考えるを得ない。前述したように、これらは、他の人物が代筆したとは考えにくいものばかりである。したがって、「悲しき玩具 歌稿ノート」の筆跡は全て啄木自身によるものと断定してよいと考える。そして、〈十七首〉はA型、〈十七首〉はD型に分類されるのである。

〈十七首〉は、我々が日常目に触れる啄木の筆跡としてよく目にする〈一七五首〉とはかけ離れた特徴を持っている。そこが、異筆説を生む原因となったと思われる。ただ、「悲しき玩具 歌稿ノート」〈十七首〉を書写する際に、なぜか、普段楷書を書くときの字形で草書体と変体仮名で書いたのである。草書体や変体仮名の駆使は当時の知識人の教養としてはごく自然のことであったと思われる。

人は、喜怒哀楽によっても体調の良し悪しによっても、かなりの違った書き振りをするものであるし、一つの書き物でも、書き出しと終わりでは大きく変わることがあるが、啄木の場合、一種系と二種系以外の書風は見るものがなかったし、書き始めから終わりまで途中で乱れたりすることはなく一貫性がある。彼の筆跡は、様々な時・所・場合等に合せて書き分けられ、啄木自身の思いや心・精神がそのまま如実に表現されていることを強く感じた。

謝辞

終わりに、この拙い研究に多大な援助と心温かい助言を賜った石川啄木記念館の学芸員山本玲子氏、岩手大学教育学部教授望月善次氏に心から感謝したい。

注

- (1) 複製『石川啄木 直筆ノート 悲しき玩具』として、盛岡啄木会から、一九七四年に刊行されている。本稿の考察はこれに拠った。
- (2) 「書道研究 一東」(一九二号、一東書道会、一九九三年三月)
- (3) 吉丸正夫「石川啄木の筆跡」(「みちのくサロン」三・四合併号、一九七五年五月)
- (4) 菊地利昭「啄木の筆跡について」(岩手大学教育学部公開講座資料、一九九三年七月)
- (5) 久保田恵子「石川啄木の書」(岩手大学教育学部卒業論文、一九九六年三月)
- (6) 注3の九十三―九十八頁参照。
- (7) 注4参照。

引用図版出典一覧

- 図ア・イ：『石川啄木 直筆ノート 悲しき玩具』(盛岡啄木会、一九七四年四月)
- 図ウ：石川啄木記念館(岩手県岩手郡玉山村大字洪民字洪民九)所蔵。
- 図エ・オ・カ・キ・ケ・シ：『石川啄木入門』(監修石城之徳、編集遊座昭吾・近藤典彦、思文閣出版、一九九二年十一月)
- 図ク・セ・サ：『新潮日本文学アルバム石川啄木』(新潮社、一九八四年二月)
- 図コ：『現代日本文学アルバム 第四巻 石川啄木』(学習研究社、一九七四年八月)

図ス：『呼子と口笛 石川啄木のノート』（盛岡啄木会、一九七五年四月）

参考文献

- 1 佐藤勝『石川啄木文献書誌集大成』（武蔵野書房、一九九一年一月）
- 2 遊座昭吾『国際啄木学会会報第6号』（国際啄木学会、一九九四年一〇月）
- 3 井上信興『新編啄木私記』（そうぶん社出版、一九九三年）
- 4 石川啄木全集『石川啄木』（第六巻日記Ⅱ、筑摩書房、一九九三年五月）
- 5 伊五澤富雄『啄木と庶民の人々』（近代文芸社、一九九三年三月）
- 6 遊座昭吾・近藤典彦『石川啄木入門』（岩城之徳監修、思文閣出版、一九九二年一月）
- 7 関西啄木懇話会『啄木からの手紙』（和泉書院、一九九二年八月）
- 8 安部たつを『啄木と函館』（桜井健治編、幻洋社、一九九二年三月）
- 9 佐藤正美ほか『石川啄木記念館』（石川啄木記念館、一九九一年九月）
- 10 『新潮日本文学アルバム 石川啄木』（新潮社、一九九一年二月）
- 11 確田のぼる『石川啄木と「大逆事件」』（新日本出版社、一九九〇年一〇月）
- 12 小坂井澄『兄啄木に背きて 光子流転』（集英社、一九八六年六月）
- 13 岩城之徳『啄木歌集全歌評釈』（筑摩書房、一九八五年）
- 14 石川九楊『書の風景』（筑摩書房、一九八三年）
- 15 堀合了輔『啄木の妻節子』（洋々社、一九七九年十月）
- 16 岩城之徳『啄木評伝』（學燈社、一九七六年一月）
- 17 石川啄木『呼子と口笛』（石川啄木のノート、啄木忌複製、盛岡啄木会、一九七五年四月）
- 18 みちのくサロン『石川啄木特集』（みちのく芸術社、一九七五年五月）
- 19 『石川啄木 直筆ノート 悲しき玩具』（盛岡啄木会、一九七四年四月）
- 20 『現代日本文学アルバム 第四巻 石川啄木』（学習研究社、一九七四年八月）
- 21 三浦光子『兄啄木の思い出』（理論社、一九六五年三月）
- 22 吉田孤羊『啄木写真帖』（緑園書房、一九五八年一月）
- 23 原子朗『筆跡の美学』（東京書籍、一九五七年一〇月）

*岩手大学教育学部

図ア 「悲しき玩具 歌稿ノート」

人がみな

同じ方角に向って行く。
それを横より見てみる心。

いつまでか、

この貝鏡きたるお話を
このまま懸けておくことやらぬ。

がりざりヒ、

蠟燭の燃えつくるごとく、
夜となりたる大晦日かま。

青塗の瀬戸の火鉢によりかかり、

眼閉ぢ、眼を円け、
時を惜めり。

図イ 「悲しき玩具 歌稿ノート」

社近し!

電燈の球のぬくもりの
さすれば指の皮膚を軟くする。

ゆるませし貝の枕近し

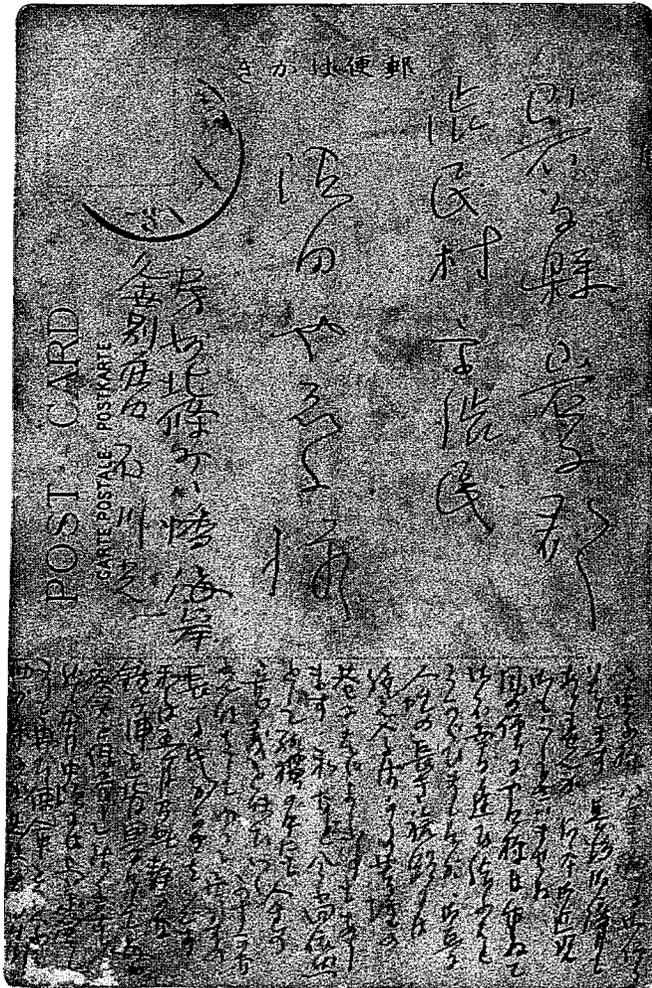
人形を甲斐ひ来てかたり、
ひとりゆきしむ。

クリストを人たるといへど、

妹の眼が、かたりくも、
それをあまれむ。

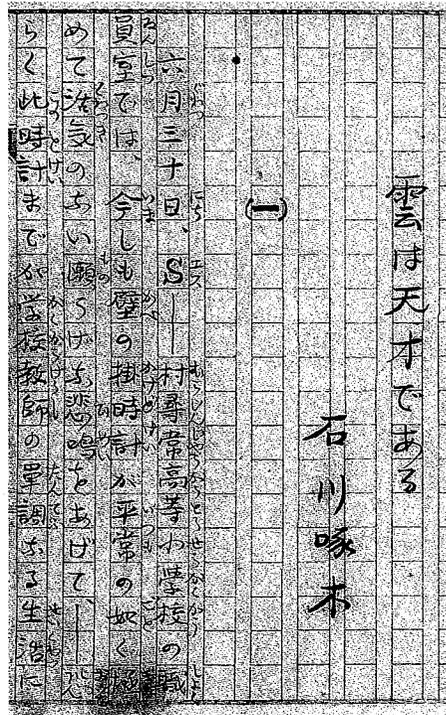
椽をまきまくら出させ、

ゆきゆきの空よりねをめぐらぬ。

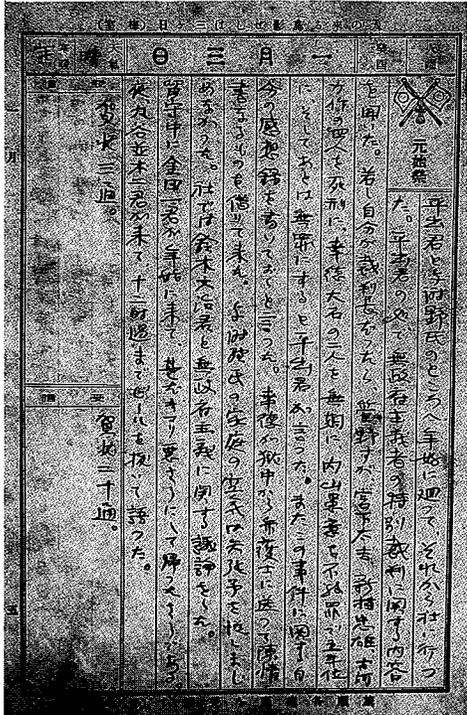


図ウ 妹 光子の葉書 (大正三年二六歳)

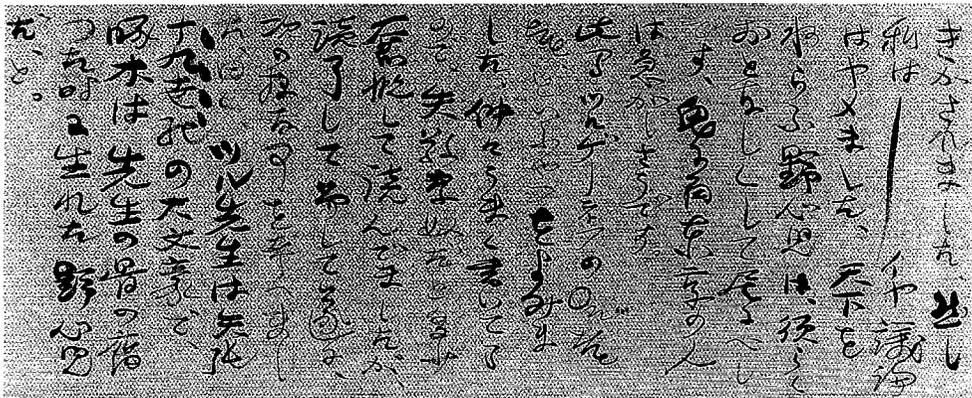
図エ 原稿用紙「雲は天才である」



図オ 当用日記(明治四四年一月三日)

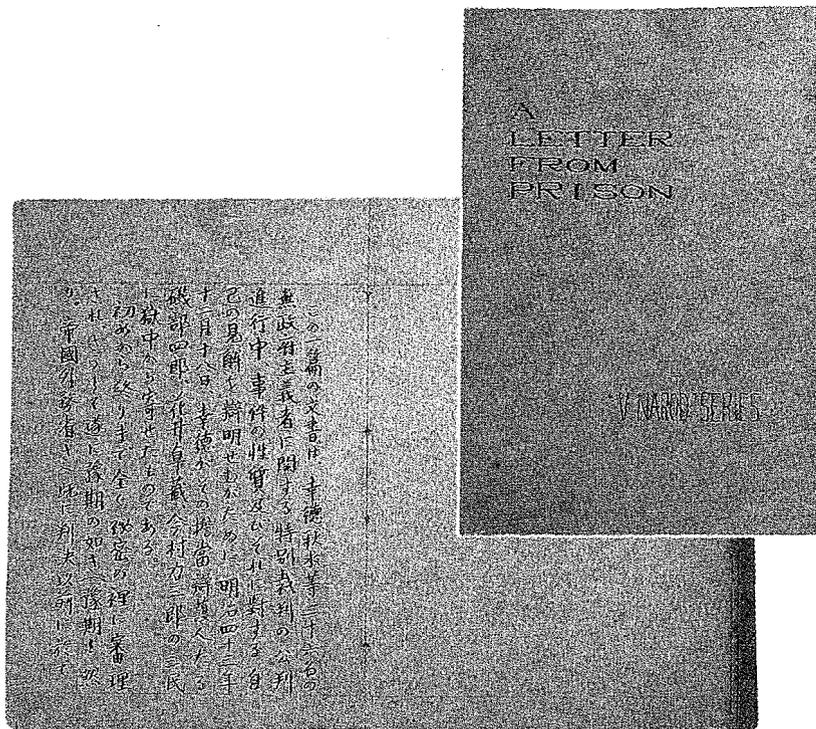


図カ 書簡



函館時代の友人 大島経男(流人)宛の書簡

図サ 「A LETTER FROM PRISON」〔民衆の中へ〕の表紙
とはじがきの一部（明治四四年）



図シ 「はてしなき議論の後」の詩稿ノート
（明治四四年）

